聖徳大学創立25周年・聖徳大学短期大学部創立50周年記念

The Future is yours!
健やかに 爽やかに 清らかに
聖徳大学25周年 短大50周年

聖徳大学言語文化研究所主催公開講演会

利休の死

内容

茶の湯を完成させた茶人・千利休（大永2年(1522)―天正19年（1591)は秀吉に茶頭として仕え、町人では参内できない宮中の茶会にも出ていました。ところが天正19年、突然、秀吉の勘気に触れて堺に蟄居させられ、続いて京都に呼び戻されて聚楽第にて切腹を命じられます。

利休が自害させられたこの事件は謎が多く、作家たちの創作意欲を唆したようで、戦後だけでも井上靖の『利休の死』（1951）、今東光の『お吟さま』（1957）、野上弥生子の『秀吉と利休』（1964）、三浦綾子の『千利休とその妻たち』（1980）、さらにまた井上靖の『本覚坊遺文』（1981）と、いくつもの伝記が書かれています。ことに井上靖(1907―1991)の場合、著作目録を見ると40代で小説を書き始めて間もなくから、83歳で亡くなる数年前まで、間欠的に利休に関する小説や随筆を12編発表し、利休が死を賜った理由、秀吉に抗弁しなかった理由、利休にとっての死の意味を40年近くにわたって考え続けました。

この間、井上靖が何を考えていたかをまとめ、お話させていただきます。

講演者

井上　修一（井上靖記念文化財団理事長）

1940年京都生まれ。ドイツ文学者。東京大学文学部卒、同大学院博士課程中退。ボン大学留学。一橋大学教授・ウイーン大学客員研究員・筑波大学教授・プール学院大学学長を経て、現在、筑波大学名誉教授・井上靖記念文化財団理事長。

主な著訳書：シュティフター『森の小道』『水晶』（学習研究社）。マイアー＝フェルスター『アルト・ハイデルベルク』（学習研究社）、ジョンストン『ウイーン精神』（共訳、みすず書房、日本翻訳文化賞）、『ドイツ文学』（共著、放送大学教育振興会）、„Über die Grenzen hinweg"（共編著　München , iudicium verlag）

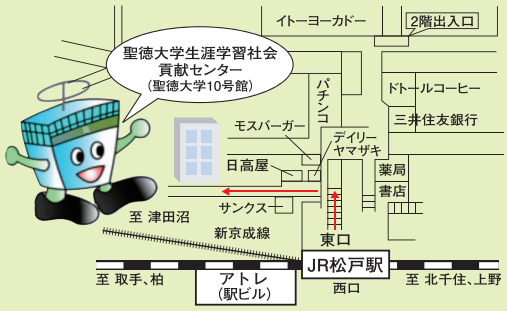
日時　平成27年10月17日（土）
13:00～14:30

会場　聖徳大学10号館14階
千葉県松戸市松戸1169　JR常磐線・新京成線「松戸駅」下車、東口徒歩1分

定員　100名（事前申込不要）

後援　松戸市教育委員会

参加費
無料

お問い合わせ▶▶▶

聖徳大学言語文化研究所（知財戦略課）
〒271-8555　千葉県松戸市岩瀬 550
電　話：047−365−1111（大代表）
http://www.seitoku.ac.jp/chizai/